

// 卷頭言 //

山梨正雄（広島大学教育学部）

「30年前の歩行訓練士の反省」

日本ライトハウスの歩行訓練指導者の養成が30期を迎えたということは、20歳代後半に第1期生だった私も、それなりの年齢になってしまったわけである。この30年、私も、視覚障害者のリハビリテーションや視覚障害児の教育の分野でいろいろなことに携わってきたが、自分のいちばんの基盤はやはり「歩行訓練」だと思っている。そのきっかけを与えてくれた日本ライトハウスに対する感謝の気持ちをあらためて表するとともに、これからも日本ライトハウスが、リハビリテーションの分野で先駆的な役割を果たしていくことを期待している。

さて、私自身が歩行訓練士として優秀であったかどうかは別として、これまでの実践経験の中で、歩行訓練士としていくつかの反省があり、それに基づいた訓練方法の改善の努力をしてきたつもりである。その中の一つを紹介してみようと思う。というのは、実は、このことは、歩行訓練に携わっている他の多くの人たちにも当てはまるようと思えるからである。

訓練において、こちらが指導したことをどんどん習得して、順調に消化していく人は案外少ない。私が駆け出しの訓練士だった頃、多少粘着質だった私はそれができるようになるまで次の段階へは進まないで、ひたすら反復練習をさせる方針だった。なかには、反復練習の成果がでて、うまくできるようになる人もいた。しかし、いくら反復させても一向に上手にならない人たちも何人かいた。

ある50歳代の男性だった。なかなか真っ直ぐに歩けなかった。極端に左にまがってしまうのである。30mも歩かないうちに、ほぼ90度左にまがってしまうのである。いくら練習させてもさっぱりよくならなかった。「なんて不器用な人だろう」と思いながらも、私も粘っこく繰り返し練習させていた。

そのうち、彼もいろいろしてきたのだろう。「できんものはできん、もうやめた」と白杖を地面にたたきつけてしまったのである。まだ若かった私も頭にきてしまい、「やる気のない人の訓練なんかできない」と、後から思えば暴言をはいてしまったのである。その晩は、なかなか眠れなかった。

翌日、まだ不機嫌な彼をなだめて訓練にはいった。私は、正面から彼の体に注目した。彼の手足の動きに注目した。そして、彼の右足が、左足よりもさらに左側に交差して踏みだすことを発見した。私は即座に「これだ」と思った。まがってしまう原因をつきとめたのだ。それを彼に伝え、右足を左に出さないように指示した。ところが、彼の右足はやはり左に出てしまうのである。そして着地の寸前にあわてて右に戻そうとするのである。そのため、かえって右外側に大きく踏みだしてしまったり、体のバランスをくずしてしまったりで、なかなかうまくできなかった。

その日の夕方、「彼の右足はなぜ左に出てしまうのだろう」と、自分で彼の歩き方をまねしてみた。何回かまねしているうちに、右足を左側に出そうとすると、左足の裏の外側に大きく重心がかかっていることに気がついた。そこでまた翌日、彼にそのことを話した。彼も何回か意識して歩き、「確かにそうですね」と納得してくれた。それからである。足の裏全体に重心がかかるように意識した彼がほぼ真っ直ぐ歩くようになったのは。

私にとって、このできごとは訓練とは何か、を教えられた大きなきっかけであった。訓練とはただやみくもに反復練習を重ねることではない。うまくできない原因を探り、それを矯正していくことこそが訓練なのだと悟った。そういう観点をもつと、その後の訓練ががらりと変わったのである。常に、なぜできない、なぜ失敗する、なぜ道を間違える、その原因や理由を見つけることが歩行訓練士の役割だと思うようになった。もちろん、その原因追究が簡単でないこともある。他の訓練士の研究発表を参考にさせてもらったこともある。

私はこれまでに、何人もの人たちと歩行訓練について話したり、相談をもちかけられたりしたことがある。かつて私がそうだったように、「ひたすら反復練習」タイプの人が多いのである。ちょっと反省してみませんか。

30年前の先輩歩行訓練士のささやかなお願ひである。